

河上肇記念会報

No. 9
1981. 2. 1

〒542

大阪市南区長堀橋筋一―三（丸善石油ビル）

千代田商事内 河上肇記念会

電話 （〇六）二五二―三六九六

振替口座 大阪 三一三一九五

特集 一九八〇年度河上肇記念会総会



一九八〇年度総会報告

十月十二日（日曜）、朝からの曇り空も、会のはじまる頃には晴れ、午後会場の広間に日光が射し込む好日となった。参加者は五十名の多きになり、午前十一時より法然院本堂において法要が営まれ、引継ぎ昼食を挟み、総会が開かれた。世話人大門英太郎氏の開会の辞のあと、世話人代表住谷悦治氏の挨拶にはじまり、橋本院主の法話を拝聴し、日程の講演と参加者数名による所感の披露がなされた。最後に河上肇の女婿羽村二喜男氏よりお礼の言葉と義父の想い出が語られ、午後四時散会した。なお当日の運営に事務局のほか京大河上祭実行委員会の二名の助力をえた。

開会の挨拶とお礼を

大 門 英 太 郎

本日は幸に好天にめぐまれ、河上先生御遺族の羽村先生御夫妻、九十翁の稲田先生初め満堂の会員各位の御出席を得て、盛会裡に総会をもつ事が出来まして幸に存じます。只今本堂に於て橋本方丈を導師として亡き先生御夫妻の法要を厳修して頂き、しみじみと先生を偲ぶ事が出来ました。ありがとうございます。

さて、昨年は東京河上会と協力、河上肇生誕百年記念事業推進本部を組織、全国に亘る多数の方々の協力と、杉山君初め本部スタッフの努力によりまして、見事に意義ある成果を挙げることが出来たと自負しておりますが、本部長に任じた私の不敏不明のために目測を誤り、約四百万円余の赤字を計上する面目ない結果を招きました。この赤字につきましては、ここに御出席の大橋先生初め御心配下さる方々の御協力によって幸に補填する事が出来、お蔭で借金を完済する事が出来ました。御協力下さった方々には何れ詳細御報告いたす所存ですが、この席を借りてとりあえず御礼申し上げます。

今一つお断りし度いのは昨年は生誕百年祭の遂行のためにスタッフが全力を傾注、会本来の活動もこれに吞みこまれた形で、会報の発行もままならぬ状態で御迷惑をおかけした事でありました。お蔭で只今、会員も二百名を数えておりまして、少なくとも今後は会報をパンクチャリーに発行致し度い覚悟であります。本総会を機に本日司会をお願いしている細川元雄さんにスタッフの中心的活動をお願い度いと思っております。細川さんは京都大学経済学部勤務、特にその図書館の河上文庫を主管

されている方で私共河上肇記念会には打ってつけの方であって、御承知の通り昨年の記念事業の一つ思文閣の展覧会を主として監修して下さいました人であります。世話人一同も挙って細川さんに期待しておる次第でございます。まして、会員各位の御諒承と御支持とを特にお願いいたす次第です。私事になって恐縮ですが、私も本年満七十五歳に相成り、いささかボケ気味であります。どうか少なくとも私より若い方々の御協力御尽力の程をお願いいたします。本日はありがとうございました。

〔以下講演及び総会発言の文責は、『会報』編集部にありますことをおことわりします〕

河上会の財政と会費納入のお願い

八〇年度（五五年）は会費を三千円に改訂させていただきました所、十二月末現在、会費納入者一八五名、寄附金若干。会の会計残高は次の通りです。

郵便振替口座残	七一九、三五五円
現金	二四、〇〇〇円
合 計	七四三、三五五円

会報のパンクチュアルな配布が出来なかったせいか、会費の納入状態が、いささか不安定であります。例えば八〇年度は頂いたが、七九年は納入がなかったという有様です。事務局も今後努力致します故何卒ご入会又は御芳志をお待ちします（その節は同封振替用紙をご利用下さい）。

【講演】

“河上肇全集について”

——編集の歴史を背に、重層する目標——

講師 杉原四郎氏



講演する杉原四郎氏

先月（九月）十四日に京都で、河上肇全集編集委員会が開かれました。編集委員の方々は全員七名であり、京都大学（経済学部）の大野（英二）さんと平井（俊彦）さんと文学部の松尾（尊允）さん、それから関西では今日ご出席の一海（知義）さんと私と五名、東京からは住谷一彦さんと山之内靖さんと合計七名が編集委員であります。この十四日の編集委員会には平井さんだけが学会でご出席できず、六名が出席、筑摩時代からずっとお手伝いいただいている京都大学の元経済学部図書室、今は医学

部図書室にかわっておられる内藤昭子さん、岩波の担当者を加え、十名の編集委員会を開きました。

そこで岩波としては、できれば来年（昭和五十六年）の秋十月、もしくは十一月に第一回の配本をだすようにしたいと、そのためには毎月一回A5判の四百ページ程度の全集を必ずだしていかなければならないので、それまでに少なくとも、完成されたもの数冊が用意されなければならぬ。そうなると今年中にその原稿数冊分、少なくとも七名おりますから、七名が分担しておりますものの中から各人一冊はだすということでないといけない。この見通しがたつと、岩波は毎年一月一日と二日に大きな新聞にその年の出版計画を発表いたしますが、もし見通がたてば、一月のはじめの岩波の予告に「河上肇全集の刊行」というのが載るわけです。それが載るとあとには引けないということになります。

そういうことで、これからの仕事をできるだけやろうと編集委員会を終わりました。全集は今のところ一応三十三巻なんです、これは『アルバム評伝河上肇』というのが最近できまして——今日も受付で売られていました——あの最後に岩波書店から全三十三巻の全集がでるはずであると書いてあるのです。全三十三巻なんです、一応第一期、あるいは本巻として二十六巻をまずだすというつもりであります。そしてその二十六巻については、ほぼそれぞれの巻を誰が主として担当するかも決まり、具体的な校訂作業に入っております。もう早い方は、すでに自分の最初の一卷を完成され、岩波に提出しておられる先生方もいらっしゃる。順調にいきましたらば来年の秋、十月二十日の河上の誕生日には岩波から待望の全集第一巻が発売されているかも知れません。できればこのように進めたいと私たちは考えております。けれども何しろ大きな事業でありますので、どういことがまた起って変更になるかも知れませんが、現状は以上のところです。

全集の内容については、のちほど申し上げることにし、ここに至るまで、かなり全集の仕事については紆余曲折があります。私もこの法然院で末川先生ご在世の頃、その当時の全集の進行状況について報告申し上げたことがあります。また河上肇記念会の第一回の会報（本誌第一号、六十七ページ）に短い文章で、その当時の進行状況を書かしていたこともあります。しかしその後いろいろ現在まで変化がありますので、はじめにこれまでの経過を簡単に述べたいと思います。このことが河上肇全集というものがどんな問題をかかえているかということをお話することにもなるわけであります。

まず河上肇著作集というのができましたのが昭和三十九（一四十四）年全十二巻ででした。この当時大へんご苦労なお仕事であり、私たち全集を今やっておりますものにとつて、大へん参考になり、基礎的文獻として活用させていただいておるのですが、何分にも全十二巻という枠があり、量的に全集というわけにはいけず、著作集という形でたわけであります。しかし河上の初期から後期までの思想の変遷をずっと辿っていく、そしてはじめて河上という思想家の全貌がわかるというためにはこの著作集だけでは量的に不十分であり、これに入っていないものもできれば纏めてもらいたいという希望がありました。大体これも売切れて、十年ぐらいたち、河上肇没後三十年というのが一九七六（昭和五十一）年で、この著作集の増補新版というのをだしたいというのが筑摩の方での企画であります。こういう相談がやはり京都で筑摩の方と、この著作集のときに大へんお骨折りいただいた白石（凡）先生がおこしになり、数名がよりまして第一回の会合がありました。

この筑摩時代の全集についての経過というのは、大きく三つの時期に分けられると思います。最初の時期は著作集を全く御破算にして新しいものを作るというのではなく、これはこれとして十二巻あり、その後でた新資料とか、是非これだけは河上の著作集に収めて欲しいという重要なものを四巻ぐらゐの補巻にして、十六巻ぐらゐで、新しい著作集を編集したらどうかということで話がはじまりました。天野敬太郎先生のプランも見せられたわけですが、これが第一期なんです。

そうこうしておりますうちに、何時であつたか、大野さんと私が羽村家にお伺いいたしました。確か冬の寒い十二月だったと思いますが、羽村家にある河上肇のいろんなノート類、あるいは新聞、雑誌に発表したもの、の切抜、そのスクラップ・ブックだとかの資料を一日かかって見せていただきました。そうしますと私たちがこれまで知らなかった貴重な資料があるということがわかりました。こういう資料がたくさん出てくるとすれば、あるいはもっと探せば出てくるかも知れない、例えば手紙にしましても、この前の時にだいぶんお集めになったのですが、結局十二巻という枠で、せっかく資料提供していただいた手紙も十分に載せられなかった憾みがある。それも必ずしも網羅的に収集されたわけでもない。その後東京河上会の会報なんかで新しい資料が紹介されたり、手紙も紹介されたりする。そういうことからみますと本格的に集めれば、いろんな資料が出てくるかも知れない。もしも今度それをやるとすれば、とても十六巻では足らんのかなということが一つ。

もう一つはこの前の著作集に対する注文としては、校訂と申しますか、例えば『貧乏物語』を採録する場合、これはご承知のように三十版で絶版になっているのですが、三十版の間に多少の改訂の版もでて、あ

るいは『貧乏物語』として三十版で終ったけれども『社会問題管見』という後の随筆集の中に上篇と中篇とはまた復活して載せられているということもあり『貧乏物語』を入れるにしても何版を定本にして、その以前と以後のいろんな版でどう違っているかという、いわゆる校訂というものが必ずしも十分ではない。ですからこの点はもし今度やる以上は時間をかけて一応定本というものをつくる必要があるということが起ってまいります。筑摩の方もやるのなら、これまでの紙型を利用するなどみみっちいことは止めて、全く新しく、しかも十二巻とか十六巻とかに囚われないで、一応全集という名前で行ったかどうかというふうにだんだんなってます。

第二期になりまして、それじゃ全集でいこうということになったわけです。そこでいろいろ羽村家にあります資料についても私たちは見せていただくことができました。それから岩国の河上荘吾さんが居られる河上の故郷のお宅にも伺いがい、いろいろな資料を見せていただきました。ここにも珍しい資料が残っていることがわかりました。こういうものも今度は是非入れようということで、全集に向けて準備を進める、そうしますととも一九七六年の没後三十年には間に合わない、そこで生誕百年の七十九年に照準を合せて、その時までにはだそうということでした。そのためには、その時編集委員が大野、住谷、山之内、杉原と四名でありましたが、とても四名ではこんな大事業を七十九年までにやるといことは無理だということで、平井、一海、松尾という三名に新しく編集委員に加わっていただき、七名で、一九七九年をめざして全二十四巻ぐらいでやろうということが固まったのが第三期であります。

この第三期二十四巻でやろうということで、ほぼ各巻の分担も決まり、これで今後は具体的校訂作業に入ろうということになりましたのが一九七七年のことであり、夏のはじめに第一回の編集会議をやろうというこ

とだったのですが、いろんな都合で秋に持ち越されました。丁度私はその夏に久し振りにロンドンに参りました。河上がロンドンで下宿をしておった場所がよくわからないので、なんとかそこを突き止めようとして友達と一緒にテムズ河の辺を歩き、ようやくこの辺にどうも河上が下宿しておったであろうというところを探して、見えました。その日帰りましたら家内から手紙が来ていて、その中に「筑摩事実上倒産」という朝日新聞の切抜きが入っており、たいへんびっくりいたしました。

4

その後数カ月、私たちはこれはこのままで終るのか、しかしなんとか道が開けないだろうかと思っといういろいろ心配いたしました。しかしながら多くの方々の尽力、とくに私の耳に入っておりますのは布川角左衛門氏とか法政大学の大島清氏とか、あるいは脇村義太郎先生とかの方々がとくに岩波に働きかけていただいたのでしよう、岩波も重い尻を上げ、引き受けることになりました。河上肇全集は再び息を吹きかえたのであります。岩波は一応筑摩の第三段階で決っております全二十四巻、編集委員七名で分担することを基本的に受け入れました。

岩波時代になり、数回編集会議を続けてきたのですが、決して淡淡ときたわけではありません。ご承知のように紙代、整本代が非常にアップいたしました、五百ページを超えるA5判のものは一冊五千円では無理ではないか、とくに筑摩の著作集は細かく組んでありますから、ちよっと読みにくい、岩波の各種全集では普通の組み方ですとても二十四巻ではすまない。また発行部数の関係もありますので、なかなか難かしい。これまでの計画をそのままふくまして、少し活字を見易くする、また五百ページ以上のものはできるだけ分散するとかいうふうにして、しかもできるだけ定価を抑える。岩波は予約出版ですから、それを全部

買う人に余り高いものになるのは困る。岩波もやはり商業出版社ですから、どうしても赤字がでることがわかっておるといふことはできない。一時は全集そのものを諦めることさえも含めて再検討するといふ時期もあったのです。しかしいろいろ会を重ねて、一応三十三巻、ただし『日本農政学』という大きな本、『資本論入門』、それから『自叙伝』については、今簡単に手に入る——『資本論入門』は青木文庫で手に入る、『自叙伝』もご承知のように岩波文庫にあります。『日本農政学』といふのは明治末期の河上の代表作の一つであり、重要なものですが数年前『明治大正農業経済学名著選集』というのが農文協からできました、そこに『日本農政学』と『日本尊農論』が一巻になって全部入っています——そういったしますとこれらは今のところ急にださなくてもよい。だすとすれば何か新味をだすといふことです。そこで、そういうものは一応後に回して、二十六巻を第一期と考えて、まずだす。このようなことであると全巻という看板をおろすかおろさないかといふことも解決し、最初に申しました三十三巻という枠が決まりました。ただし今申しましたように第二期と言いか、補巻と言いか、そこに七巻が回っている。そのことについてはまだ本当のつめまではいっておりませんので、あるいは三十三巻という巻数そのものが最終的に若干変わるといふことも考えられますが、こういうことで来秋スタートをめどに編集作業が進行しているわけでありまう。

5

それではその全二十六巻という最初の中身ですが、これは大きく二つに分れ、一巻から十九巻までは河上が生前に発表いたしました著書、論文を発表順（年代順）に配列されます。最初は明治三十年頃から、彼が東大の学生であったとき、郷里の長周新聞とか防長新聞とかといった口

カルな新聞に発表したものから、最後に非合法の生活に入る直前、昭和七年頃までの論文、随筆、単行本など、彼が発表いたしましたものができるだけ全部一巻から十九巻に入れる。ただし翻訳は除く、これは問題であります。しかし翻訳まで入れるとなればとても二十巻や三十巻で間に合いません。といふことで発表、活字になったものでも今度の全集では翻訳はすべて除かれることになりました。除くといひましても、実際に翻訳的な解説もあれば、内容的にはほとんど翻訳に近いような論文もあることで、なかなか一線を引くことが難しいわけです。原則として翻訳およびそれに準ずるものは除くことにしております。それ以外のもの——第二期にまわした『日本農政学』、『資本論入門』は別にいたし——は単行本、新聞や雑誌に載せたものはできるだけ網羅的に入れるといふことであります。

それから二十巻以降二十六巻までは主として河上の没後公表され、あるいは公表されていない原稿であります。第二十巻は『陸放翁鑑賞』、これはすでに何年前にも活字になっておりますが、これが入り、第二十一巻にはいわゆる詩歌、それから随筆、その他、また「詞」についてのエッセイ、広い意味での文学的作品を詩歌を中心に載せる。第二十二、二十三巻は日記であります。日記もご承知のように『獄中日記』、あるいは『晩年の生活記録』という形で公表されたものがありますけれども、全部もとの原稿にかえりまして、これまで省かれていたものはできるだけ起すという作業であります。これは今寿岳文章先生のもとで見ただいております。最後の二十四、二十五、二十六の三巻は書簡であります。これがおそらく今度の全集の一つの大きな特色になろうかと思うのですが、一般的に全集の魅力はそこに書簡がどの程度含まれているかどうかによって決まると言われるほど、全集の場合は書簡が大事なものです。これも関西の河上肇記念会、東京河上会のメンバーの方々および

ろんな方々のご協力とご厚意により、今岩波の手元にたいへん多くの貴重な書簡が集められております。すでにその書簡の清書作業がはじまっております。現在約二千通ありますが、さらに増えるものと思われ、はたして三巻に全部含められるかどうか、多く集まれば集まるほど喜しいようで、余りたくさんになるとどうしようか岩波としては複雑な気持ちになるのです。

ともかく私たちの予想を超え非常に多くの貴重な書簡が集まっております。これは大きく分けると、河上の肉親——家族、つまりお父さま、あるいは夫人、あるいは兄弟——への手紙で、これまで私たちは知りませんでしたものがたくさん出てまいりました。それから友人との文通、とくにこれまで全然出ていなかった書簡、書簡類といったものが出まして、それを読みますと、これまで全く知らなかった河上の人柄、生活の側面が新しく浮びあがるということもあります。

まずこういう人間河上ということだけでなく、経済学者河上の他の学者との間の関係——学問的關係についてもたいへん面白い資料が出てまいりました。先月岩波にいき、その書簡をやっている人に聞いたのですが、久留間鮫造氏——もう大分年寄で九十歳位の方がいらっしゃいますが——宛の河上の手紙を久留間先生のところへ行って何通かをお預りしてきた。それをみますと大正末期の河上が経済学史を新しくマルクス主義的に書き直そうという非常に重要な時期に久留間さんの論文が発表された。それをいち早く河上がみて、久留間さんにあなたの論文を見、たいへん自分は教えられることが多かったということを久留間宛書簡に書いておられる。こういうことは日本の経済学史あるいはマルクス主義的な経済学史の形成の上で、非常に貴重な記録であると思いました。それから肉親への手紙のことで、例えばご承知のように河上は大正二年秋に神戸を出帆して約一年半留学をいたします。その留学の間むこう

で見聞したものを日本の新聞、その他に送って、帰りましてから『祖国を顧りみて』という本にして出しておるのですが、これでだいたい河上のドイツ、フランス、ベルギー、それからイギリスでの生活が伺えるのですが、細いことはこれだけではわからず、例えば私がロンドンで彼が下宿をしていた処はどこだろうと探す場合でもちゃんとしたアドレスがこれには書いてありません。そこで見当をつけて行かなければならない。ところがその間に彼はたいへん筆まめにお父さま——忠宛に絵はがきや手紙をだしているわけです。それが岩国に残っております。それをみせていただきますと、とくに絵はがきにちよつと書き込んである文章が面白いです。これらをどういう風に全集に入れるかどうかを検討を要します。このような絵はがきや手紙が数十通あり、これをみてまいりますと『祖国を顧りみて』だけで私たちが知っている彼の一年のヨーロッパ留学——途中二、三か月以上が船ですから正味一年と少し——その間のヨーロッパの彼の見聞というのがかなりわかってまいります。

こう言う点で二十四、二十五、二十六巻に入ります彼の書簡はこれまでの河上像をはるかに豊かにする非常に興味のある、いろいろな、経済学者としてだけでなく、多方面の河上の姿がことさらにでてくる、新しく浮び上ってくるものではないかと思えます。

6

それから私たちが今編集上で問題にしている一つは、河上の著作、例えば『貧乏物語』のどの版を基礎として校訂作業をするかということです。これは今のところ、原則として最終版、生前の最終版を定本にするということで作業を進めております。ところが『貧乏物語』のように三十版で絶版だというはつきりわかっている場合は楽なんです、一体何版が最後であるかということは厳密にみますと一つ一つの著作について

調べなければなりません。これがなかなか厄介なので、調べておりますうちに、その版がどうしてもまだ手に入らない、例えば『資本主義経済学』の『史的発展』というたいへん有名な書物があります。大正十二年にでたのですが、これが弘文堂から大正の終り頃までたいへん版を重ねておるのです、こういう版のことにつきましては天野敬太郎先生の『河上肇文献誌』というのは各著作について非常に詳しく何版まででたという一番新しい版まで書いておられる。けれどもその後の調査で、それ以降に版がでたということがわかってきています。

この『資本主義経済学』の『史的発展』なんかは実に昭和五年頃に、しかも弘文堂でなく改造社からでているという広告が雑誌『改造』に載っているのです。こんなことは私たちこれまで夢にも思わなかったことなんです、といえますのは『資本主義経済学』の『史的発展』というのは『経済学大綱』という昭和三年にでた、つまりマルクスの厳密な体系にのっとってお書きになった『経済学大綱』の原論のあとに、これはたいへん自分としては不十分なものであるけれども、少し手を加えて、『資本主義経済学』の『史的発展』をそこに全部載せるという「ことわり書き」をして、事実本文中にはスミスやリカードの労働価値説をわざわざ書き加えて、いわば『資本主義経済学』の『史的発展』の増補、新版というのを『経済学大綱』として改造社から出していらっしゃる昭和三年に、それを昭和五年に同じ改造社から『第二貧乏物語』を『改造』誌で連載していらっしゃる、その広告に『資本主義経済学』の『史的発展』が載っている。私なんかは戦前見たことがありませんし、どうなんだろうと今だに半信半疑なんです。例えばそういうことでもし改造社版の『資本主義経済学』の『史的発展』をご覧になるか、あるいはこれに関する情報をおもちの方は是非教えてください。

こういうことが外にもまだあります。私たちとしては今後全集を編集

していく基礎資料の収集ということで、まだ仕事が残っているわけがあります。

また雑誌とか新聞に載ったものでも、まだまだおちがあるのではないかと、ともかく河上はものを書くのが好きでもあり、社会からの需要があるので、非常に広く、いろいろな雑誌や新聞に文章を書いているわけです。それが天野さんのご本、それ以後天野さんは何回にもわたって増補の文献目録をだしておられますが、なおかつ今だに「あれ」と思うような雑誌に河上のものが載っているということがあるのです。こういうことで今後私たちの仕事は基礎的な河上の著作の収集という点で、なお仕事が残されているということです。

さらにもう一つは無署名の問題です。恐らくこれは河上が書いたであろうと思われるのですが、しかし確証がない。ない限り簡単にそれを河上のものと断定して全集に入れ、あとでそうでなかったということになると取り返しがつきません。無署名であるけれども、河上が書いたかも知れないと思われるものをどういうふうに確定していくか。それから河上肇でなくて、千山万水楼主人だとか、黒頭巾だとか河上がたびたび使ったペンネームで発表されているものの中で、本当に河上のものであったかどうかを確定する作業がまだ残っております。今後いろいろ皆様方のご教授やご援助をいただきながら、できるだけ厳密で、豊富な全集を作っていくようにしたいと思っております。

7

しかしこれは全集といっても、今いったような意味で、所詮本当の意味での全集ではないということが、例えば翻訳を除くという点でもそうです。それから彼はノート類をたくさん残しております。例えば「経済原論」、「経済学史」というものについて河上は毎年新しいノートを作

ったということであり、それらが羽村家に残されており、私もその中の一つをこの前大月書店から『経済学史講義』として校訂し、ださしていただいたのであります。これらは河上が徐徐にマルクス経済学の方へ変っていくところ、一冊一冊がたいへん重要な意味をもっています。それを全部全集に入れることはとても出来ない。

こういう点では今度の全集は、少なくとも筑摩の全十二巻の著作集と比べますと遥かに内容的にも充実したものですけれども、本来の意味での全集というものはまだほど遠いことを私たち編集委員も卒直に認めざるをえません。しかしこのことは一つはやはりこの日本が資本主義国であり、河上肇全集を商品として販売されざるをえないという基本的な実情がありますし、また私たち編集委員の能力の限界ということもあります。私たちとしては、その条件のもとでベストを尽すということしかないと思います。

ご承知のようにマルクス・エンゲルス全集というのが大月書店からでおります、これは日本では全集となっていますが、ドイツ語の方では全集といつて、一応著作集、全三十九巻と補巻が数巻でています。これがやつと東ドイツのマルクス・レーニン主義研究所でました。しかしまだ決して全集ではありません。全集は今でつある、全百巻ぐらいであり、ソビエットのM・L研究所と東ベルリンのM・L研究所が全体の組織をあげて、共同し、本当の全集を今刊行しつつある。これが戦前は途中で挫折したものです。あのリアザノフがやったものです。全三十九巻のロシア語版マルクス・エンゲルス著作集、ドイツ語版マルクス・エンゲルス著作集をやつて、それから数年経って今度はいよいよ本家のマルクス・エンゲルスの——それこそノートも全部入れる——全集は彼らの場合でも、しかも社会主義国の二つの研究所が協力してだしつつあるということです。

こういうことを考えますと、本来の意味での河上肇全集というのが出るとすれば、A5判五百ページで、とても二十冊や三十冊ではきかず、おそらく五十冊、それ以上になるかも知れない。それがおそらく本当に出るのは、河上肇が本当にそういう国に日本がなったらいだらうと思っていた、そういう国に日本がなるときではなからうか、こういうことのための一つのステップとしてでも、今度の全集をできるだけいいものにしていきたい。

それにしても、河上に対する一般の関心がどれだけ深まり、全集がどれだけの予約に応じる読者があるかというたいへん重要な問題になってまいります。幸いにして生誕百年でこの東京・京都の河上会がいろいろな記念事業をして、河上への関心を盛り上げていただきました。また今年になって、新評論からでた、NHKのテレビ放送を基礎にした『アルバム評伝河上肇』という立派なものもでました。また新評論からはここ十日以内に『求道の人・河上肇』というA5判、二百数十ページの本がでます。これは昨年の京大でのあの記念講演、東京での記念講演を収録して、住谷一彦さんが解説をおつけになった、たいへん参考になる書物であります。それからまた京都では今『貧乏物語』の朗読というたいへん河上に対する関心を深め、河上を勉強する良い企画が進行中だそうだと聞いております。このようなことによつて河上への関心が深まってくということが、全集が軌道に乗って成功していくうえに大きなプラスになることだろうと思っています。こういう点でも皆さま方のご協力やご援助を願う次第です。



総会発言「河上肇記念会とのあい」

追悼「藤井松一氏」と『貧乏物語』音読会

塩 田 庄兵衛

私がこの会に参加させていただくようになりました、数年なんです、今、実は気が滅入っています。ご存知の方が多いと思いますが立命館大学産業社会学部の藤井松一氏が六日（十月六日）大学で心筋梗塞で倒れ、そのまま亡くなり、今日が初七日になるのです。実は私がこの会に最初に参加させていただいたのは大門さん、安井さんのご案内をいただいて知ったわけですが、一緒に行こうと連れてきてくれたのが藤井君でした。藤井君とは戦後まもなくから三十数年間の親しい友人でありました。私は藤井君と毎年この会に一緒にきておりましたことを思い出します。最初に来ましたときは、非常に寒い日であった、先生のご命日の前後か、本堂は寒かった。その当時は末川博先生はお元気で、住谷先生と並んで私たちも読経を聞いていたのですが、藤井君に「寒いな」といったら「別になんでもないよ」といっていた。つまり私より丈夫にできていたのです。そういうことを思い出します。

彼は日本近代史の専門研究者であり、いろいろな仕事をやっておりますけれども、これからやりたい仕事がたくさんあり、その中の一つにやはり河上先生を思想的研究所に入っていたと私は承知しておりました。こんなこともありまして、この機会に藤井君を偲ばせてもらいたいと思います。

それで今杉原先生のお話の中にちょっとご紹介していただきました、またご参会の皆さまのよくご存知のこと、すでにご参加していただいた方も今日ご出席の方の中におありになるのですが……。先程橋本方丈さんが皆さんの頭を拝見していると、先が思い遣られ……。とたいへん卒直な感想をもらされたのですが、私を含めまして——私はこの中でいくらか若手の方じゃないかという気がするのですが——何とか河上先生に對する関心、河上先生を勉強して将来に生かしていくということを若い人の中に広めて行くことを、いろんな方法でやらなくちゃいけないだろう、その一つの方法として——河上肇記念会の直接の仕事ではむろんありませんし、直接の仕事のように僭称する権限もありませんが——河上肇先生の書かれたものを皆で読んで、味わう、そして出来るだけ理解するように努めるということを考えました。

私のごく親しい付き合いをしている人に山本安英という俳優と木下順二という劇作家がいて、この人たちが中心となって東京で言葉の勉強会というのをやっております。たいへん順調に永く続き、良い仕事をやっております。いふなればこれの京都版で、日本人が書いた良い文章で、皆が読んであとに伝えていかなければならないものの代表作として河上先生の著作がある。こういう考えからまず『貧乏物語』の音読会を——杉原先生は正確に朗読会といつて下さったのですが、私たちは何も知らないで名前を音読会と付けた。専門家に言わせると音読とは訳分からずに棒読みすること、意味を理解して読むのが朗読だそうなので、会の名前を変えなければならぬと思っております——はじめたのです。そのうえ趣向を凝らし、毎回いくらか専門的に勉強している者が出演をいたし、時間の半分を河上肇先生についての研究報告をする。水準は高校生に分るようになるといふことがきびしい条件となっており、大学院

生に講義をするのではないということです。それで杉原先生にも『貧乏物語』が書かれた頃の日本経済学というお話を伺う予定になっておりますし、一海先生には『貧乏物語』の中国訳その他、また漢詩のお話を伺えるんじゃないかと非常に楽しみにしているわけです。それから今日司会をして下さっている細川さんには河上文庫の解説をしていただく、その他寿岳章子さんに当時の言葉や文章について話していただく、今月は京都大学の松尾尊允さん、続いて同志社大学の望田幸男さん、さらに立命館大学の今の貧困化論、生活問題専門家の真田是さんに『貧乏物語』の頃の貧乏と今の貧乏と比較対照論などを話していただく予定です。それから河上肇の遺跡探訪というので、お墓まいりをして、以前お住まいであったところを訪い、あるいは進々堂でお茶でも飲もうといった計画であります。

『貧乏物語』を一年がかりで読もうと考えているのですが、今お話をうかがっていたら全三十三巻の全集ができると、これを読むには一世紀以上かかるのではないかと、完全な全集が仮りに五十巻ぐらいできますと数世紀に渡って、子々孫々まで、天上とともに極まりなく、日本の国がどうなっても、河上先生の記念事業だけは新しい形を開発しながらやっていく必要があるのではないかと考えています。

労農党玉砕大会

——『アルバム評伝河上肇』にふれて——

松 本 云 治

私がこの会に出席するのが、実は今日がはじめてですが、大門さんとずっと一緒に、昔は昭和四年四・一六事件で、大門さんは京都で、私は大阪で捕まった仲間で、戦後もずっと親しくしていただいております。話に入る前にこれを（『アルバム評伝河上肇』）いただきまして、五十

ページの写真が非常に懐かしい、といいますが丁度この辺に私が居てこの場面を見ています。昭和三年十二月の労働農民党の結党大会で、これは労農党玉砕大会と称して、自分で潰した大会ですが、河上先生が和服姿で出られ、演壇でちょっとお話しをされたのです。私は大阪の代議員で、地方報告をやって先生に私の話を聞いてもらって、大阪の報告はなかなか良かったと賞めてもらったことを思い出し、感慨無量な写真であります。

実は去年の百年祭のときに大門さん宛に出した手紙がありますので、これを読ましていただき、私の責めにかえたいと思います（以下略）。

『燎原』のこと

伊 垣 次 光

私は旧制水戸高校で、宇都宮徳馬、水田三喜男、広川伝助と同窓でした。覚えておりますが、彼らは二年ほど上で、「行くんだったら東大の上杉慎吉なんかのところへ行くな、河上教授や山本宣治さんたちのいる京都へ行きなさい」といった。私は「君たちは大学へ行きなさい、私は実践運動をやるんだ、正しいものが正しいと信じたらやらにやおけん」と多少勇み肌のお坊ちゃんみたいなのもあったのですが、結局四・一六でやられまして、満期出獄したわけなんです。

その後のことは省略して、現在もう二度と再びあの暗かった敗戦前の時代を子々孫々に絶対味わしてはいけないという立場から、現代戦争を知らない世代が日本人の半ば以上を占めている現在、今またあの時代の仕掛け人の仲間たちが権力の座に就いて、またぞろぶつそうな企てをやっている。勿論平和勢力は当時と比べものにならない程強くはなっておりますが。たまたまこの時、昨年は山本宣治虐殺五十周年、生誕九十周年に当り、私も事務局次長をやらされていたのです。河上先生百年祭

を迎えて、これは良い機会だということで、この際生き証人を中心として十二、三人、塩田先生やら、山田幸次さん、世話人代表として住谷悦治先生とで、京都の民主的な歴史を語る会をつくらうじゃないかということ、今年の三月頃やるとき発足しました。毎月例会として生き証人を中心に話をしていただき、その後質疑応答ということで、三時間ばかりやっております。これも記録をとっておかないとその場限りになり、宝の持ち腐れになってしまうので、一点の火も原を焼きつくすという意味の『燎原』という会誌を発行、B5で第一号は四ページあったのですが、御蔭様で末広がりになりまして、今度の第八号は十二ページのものをつくりました。今後とも維持していこうじゃないか、もっと権威のあるものにしていこうじゃないかという意見がでております。

思いますのに、かなり理論的に強い方でも、若い歴史の勉強家でも、また古いものにしても、案外敗戦前のことと関連したものになりますと弱い面があります。私たちは本当に手前の書きたい歴史——権力の座につくと自分本位のものを書くようになります——を、やはり切磋琢磨して——ああでもない、こうでもない——正しい、本当に後世に残すに価するようなものとしてつくる心構えでやっております。誌友は年間二千元、会報三千元ですので、よかったですら入会、参加して下さい。

愛—人間への愛が河上を導き……

相 沢 秀 一

昨年秋、生誕百周年記念行事にしましても、本会も大門さんを中心としての事務局の各位のご努力によるものと深く感謝しています。と同時に病氣のために、何らできなくて申し訳なく思っております。先程ご住職の言葉にも集まった人は老けた人ばかりで、私も寂しく思いました。もともと河上先生にびかに接し、ご指導を受けた人たちが河上会を作

ったのですが、先程、杉原さんのお話しの筑摩書房から河上肇著作集がでたときを機会に河上肇記念会に改組したわけなんです。先生から直接教えを受けた人たちはだんだんあの世へ去っていく、私の身辺でも昨年五十年來親しく先輩でありました長谷部文雄さんが私のところへ「君の病氣の方が俺よりも酷いらじな……」といったはがきを呉れました。その返事を書こうと思った四日後に訃報に接したという状態で、周囲が死んでいくわけです。河上肇記念会はこの世代を超えて、河上先生を敬慕し、同時に河上精神を体して、将来の日本を担っていく若い世代の人がより多くこの会に入っていたことを希望し、一時はそうであったように記憶するのです。名簿の上ではそうなっておるんであろうと思うのですが、今日はこのような老人ばかりの集りになって、いささか寂しい気持がしています。

私は河上先生に講義を聞き、お逢いもしました。河上先生が当時の情勢のもとで大学を去らねばならんという事態がありました。河上先生はどんなことがあっても自分は大学を去ることはないということだったのですが、たまたま河上先生が辞意を表明されたということを知り、私たちが代表三名が今羽村ご夫妻のお住いになっておられる二本松の家に参りまして、先生の書齋で——多分二階へ通していただき、その窓からあの時計台が見えました——二、三時間、先生に是非思い止まってはしい意志を表明して、懇請したのですが、先生は、「いや経済学部教授会は自分が去ることを決めた以上、いやしくも大学自治を守る自分としては、経済学部教授会の意に従わなければならない」というお言葉をだして断固、私たちの要請を排除されました。これでは仕方がないと思いました。それ以来、先生と密接な交際をさせていただいた次第です。昨年の生誕百周年に当り、つまらない雑文のある雑誌に載せた時、こう書きました。河上先生の辿ってこられた人生行路、あるいは思想行路は紆余曲折で

あつたと思われまふ。しかしながら先生はあくまでも眞実を求めるためにあのような道程をおとりになつたのであり、その底には先生のいわゆる純粹な、人を愛する氣持が原点にあつたと思うのです。この純粹に人間を愛することこそ、まさにヒューマニズムであると思う。だから人間を愛することは、同時に人間をあらゆる逆境から、あらゆる苦勞から、さらに戦争から解放していかねばならないというお考えだと思ふのです。これがまさにヒューマニズムの考えである、そういう意味で、私は河上先生がヒューマニストであると考えております。だから河上先生はヒューマニスト河上を自己否定してマルクス主義者、共產主義者になつたのではなく、共產主義者、マルクス主義者になることによって本當の意味の、正しいヒューマニスト河上に大成したのだというのが私の主張であります。

その意味合いで、今日極めて暗い世相になりつつある時、この河上精神というものを、そして本當に眞実を探求していくことはまさに平和と國民の幸福を願う眞情であると、そういう氣持を多くの若いゼネレーションの方が持つて下さつて、日本の將來は再び暗い時代にならないようにと考えておるわけです。事務局構成の方々のご努力によって、さらにさらに若い方々へどんどん引き付けて下さることを期待しています。殊に杉原さんのご努力によって『河上肇全集』ができることは、河上先生に対する多くの読者が引き付けられるだろうと思ひます。またそれを通じて河上精神というものが日本の青年の人、壮年の人の頭の中に滲み渡つてほしいと切望しておる次第です。

病弱のメンバーとして

大 橋 隆 憲

いつでも応援団ですみません。体力がありませんので、責任ある仕事

は一切お引き受けできません。いつでもボランティアで、勝手なとき出てき、勝手なお手伝をし、勝手に逃げ去る、という次第です。いつでもこういう遣り方で御迷惑をかけていますが、その程度のお手伝いをさせていただく所存でございます。

ともかく一番心配していますのは、東京河上会でもそうなんです、若い人がどうしても出てこれないので、年寄りばかりが多く、話があるも時代はなれるようです。出来るだけ若い人に何とか引き継いでいただかないと、先き細りになる心配がございます。今度事務局は若い人に移り変わりましたので、何とかなると思ひますけれども、是非一つ若い人が、新しい体制を組みあげていただきたいと思います。

河上の身内より

羽 村 二喜男

本日は命日に多数ご参詣下さいましてありがとうございます。ことに昨年は生誕百年祭ということで盛大な、いろいろな催しをしていただきましてまことにありがたいことと感謝しております。有り難いと申しますのは文字通り、ありにくいということ、稀なことだと思ふ、大学教授で生誕百年祭を祝つてもらつたような者はめづらしいんじゃないかと感謝にたえない次第でございます。自分の事を申しましてはなはだ失礼ですが、けれども、丁度その頃ときどきまいをおこし、どうかすると倒れそうになるようなことで、百年祭のときにはどこへもまいりませんで、はなはだ失礼した次第です。この機会におわびを申し上げたいと思ひます。もう死亡広告でしたら、「天寿を全うして……」と書れても文句の言えない年齢になつておりますので失礼しております。この際おくれればせながら厚くお礼を申し上げます。なお、とくにお礼を申し上げたいのは、先程お話がありましたように来年は全集ができる見込みになつておるよう

すが、これにつきましては編集委員の方々は勿論、その他関係の方々の非常なご協力でのような運びになっているのであります。殊に編集委員の方々のお骨折りは私も想像を絶することだと思つたので常々感謝しております。何分私は自然科学の方をやっておりますので、全く経済学の素人で、何もお手伝い出来ません。はなはだ申し訳けない思いながら、ただただ蔭で感謝しておるだけに終つております。どうぞ悪しからずご了承いただき、何とぞよろしくお願い申し上げます。

なお立ちましたついでに、河上が書いたものの中に「真理を愛する柔らかな心」とか言う言葉があつたように思つております。その一つの現われじゃないかというようなことを思い出しましたので、ここで一言申し上げたい。と申しますのは私が今申しましたように自然科学の方、電気の専門でありますので、経済のことは何もわかりません。その意味ではたよりない婿だつたらうと思うのですが、私が何か話をしますと、それこそ絶対に信用するのです。つまり自分は自然科学関係では素人だという意識があるのでしよう、自分、己れを無にしてしまつて、全く無我といひますか、その状態で私の言うことを聞き取る、絶対信用して聞くものですから、むしろこつちが氣味悪いぐらいです。理学の方で、黒点というのがありますが、ご存知のようにすっかり取り囲んだ箱に小さな穴を開ける。その穴のところを本当に真黒だというのがあります。これは穴から入る光線は中へ入つて全部中で反射して外へ出てこない、吸収するばかりで光がぜんぜん出てこない。こういうのは暗箱、ちつとも黒ではないが本当の黒だと、これを想像する、何もない虚ろなものがそこにて私の言うことを全部吸収してしまう、吸い取られているような感じがしました。このようなところがあの人の一つの特徴じゃなかったんじゃないかということを思い出しました。

今日は山門に入ること禁じられているおみきをいただきましたので

いらんことを申し上げました。ありがとうございました。

河上肇生誕百周年記念論文・記事目録

細川元雄

つぎの図書案内欄でとりあげる『求道の人・河上肇』の中で、編者住谷一彦氏により主な記念行事として講演会、雑誌での特集が紹介されている。一部重複をいとわず事務局で収集したものを雑誌、新聞に分け、論題、執筆者を掲載順に示した。(配列は刊行年月日順)

一、雑誌

世界 (岩波書店) 一九七九年二月号

捕囚の思想—河上肇生誕百年によせて、住谷一彦

書斎の窓 (有斐閣) 一九七九年一〇月号

河上肇と彼をめぐる人々—生誕百年に寄せて、杉原四郎

図書 (岩波書店) 一九七九年一〇月号

ミル・マルクス・河上肇—河上肇生誕百年に寄せて、杉原四郎

思想 (岩波書店) 一九七九年一〇月号△河上肇—生誕一〇〇年▽

河上肇における異端への途、石田雄

河上肇の『自叙伝』—河上肇における「没落」と「文字」、西川長夫

もう一つの「自画像」—河上肇の陸游研究、一海知義

アメリカの研究視角から見た河上肇、ゲイル・L・バーンスタイン (訳)

酒井真理

思想の言葉、大島清

朝日ジャーナル (朝日新聞社) 一九七九年十一月三十日号

「河上肇展」と「有島武雄展」(文化ジャーナル欄)

経済 (新日本出版社) 一九七九年十二月号、△河上肇生誕一〇〇

年

日本経済学史上の河上肇、杉原四郎

河上肇——その人と思想、塩田庄兵衛

『資本論』と河上肇先生、宮川實

河上肇先生の思い出、堀江邑一

前衛（日本共産党）一九七九年十二月号

『河上肇生誕百年記念講演』、河上肇と日本共産党、小林栄三

経済論叢（京都市大学経済学会）一九七九年一一・一二月合併号、

△河上肇生誕一〇〇年記念号▽

福田徳三と河上肇、杉原四郎

初期河上における経済政策論——輸入米課税論争をめぐって、大野英二

河上肇の『国家論』小考——『政治学講義』草稿について、住谷一彦

漢詩人河上肇の旧蔵書——京大河上文庫訪書記、一海知義

河上肇と「加算と減算」、高寺貞男

『改版社会問題管見』序文、山之内靖

財政問題よりみた河上肇「貧乏物語」、池上惇

河上肇における科学と宗教と哲学、古田光

△資料▽京都市大学時代の河上肇、細川元雄

学士会会報 一九八〇—Ⅰ

河上肇博士生誕百年に想う、大河内一男

東京河上会会報 一九八〇年二月

河上肇生誕百年祭の意義——記念講演会を聴く、住谷一彦

河上肇生誕百年記念行事（記事）

二、新 聞

琉球新報 一九七九年九月二三日

河上肇生誕百年をしのぶ、住谷一彦

朝日新聞 一九七九年一〇月一六日夕刊

畏敬河上肇先生——生誕百年に寄せて、松田道雄

琉球新報 一九七九年一〇月一九、二〇、二三日

河上肇生誕百年に寄せて——沖縄とのかかわりの回想（上・中・下）、

浦崎康幸

赤旗 一九七九年一〇月二〇日

河上肇と日本共産党——河上肇生誕百年小林栄三常任幹部会委員の記念

講演（要旨）

京都新聞 一九七九年一〇月二一日

河上肇生誕百年をしのぶ、住谷一彦

京都民報 一九七九年一〇月二八日

盛大に河上肇生誕一〇〇年祭（記事）

京都民報 一九七九年一二月四日

河上肇生誕百年に寄せて、塩田庄兵衛

日中友好新聞 一九七九年一二月九日

河上肇生誕一〇〇年記念資料展、講演会（記事）

なお、「毛沢東思想学院」の河上肇生誕百年記念祭は図書案内『不屈

のマルクス主義者河上肇』において取り上げるが、これをめぐって、(1)

『赤旗』一九七九年九月四日に「河上肇の名をかたる中国盲従文子の反

共策動」、(2)『現代の眼』一九七九年一二月号、井上清「河上肇と大塚

有章のこと」、(3)『赤旗』一九七九年一〇月一三日、足立正恒「河上肇

生誕百年と反党分子の党攻撃——井上清の一文について」の論文がある。

以上のほかに、未収集の論文・記事があると思われまますので、是非お

教え下さるようお願い申し上げます。

図書紹介

『河上肇——学問と詩』杉原四郎・一海知義著、新評論、一九七九年一〇月、一八〇〇円

本書は河上肇生誕百年記念出版としてタイムリーに刊行され、しかも「河上のことをよく知らない人々、とりわけ若い世代の人々に河上の人物とその業績のことをもっと知ってもらいたい」という意図で編まれたものである。しかも河上の学問と詩に対する第一級の研究者の書かれた本書は、今日河上の格好の入門書となっているとともに、専門研究者にも欠せないものである。



河上肇——学問と詩

宮川實著、学習の友社、一九七九年一〇月、七〇〇円

著者は「はしがき」で、「わたしは河上学校の卒業生である」と書き、本書を「先生のそばにいて、先生の苦悶の有様を目のあたりにみた……一人として、わたくしの見たままのことを書き残しておきたい」という意図で書かれたものである。本書は第一部見たままの河上肇先生（評伝Ⅱ人）、第二部河上先生はなにを問題にし解決しようとしたか（理論的遍歴Ⅱ思想）を平明な文章で綴ったものであり、新書版一五八ページの河上肇入門書として最適。

『アルバム評伝・河上肇』西川勉編、新評論、一九八〇年八月、一八〇〇円

一九七九年八月二十八日夜NHK教育テレビで放送された「テレビ評



アルバム評伝・河上肇

定着したのが本書である。本書はテレビ評伝のディレクターでもある西川勉氏の真摯な努力によって密度の濃い作品となった。しかも本書に付された西川氏の「河上肇私論——河上と民衆」は今日の河上研究の方向性をも示している。

『不屈のマルクス主義者 河上肇』井上清編著、現代評論社、一九八〇年九月、一五〇〇円

本書は河上肇の義弟大塚有章氏の発案、井上清氏を実行委員長とする「河上肇生誕百年記念祭」の活動を中心にし、出版されたものである。

井上清氏の標題となった河上評伝をⅠに、すでに記念祭誌として出された大塚有章氏などのエッセイ、特別寄稿として中国の王学文氏の「河上肇先生の想い出」をⅡとして掲載し、河上の著作抄を付録として収めている。

『求道の人・河上肇』住谷一彦編、新評論、一九八〇年一〇月、一八〇〇円

本書の骨格は一九七九年一〇月河上肇生誕百年を記念して、学会、東河上会が開催した講演会を集めたものである。大河内一男、谷川徹三、

伝・河上肇」は、河上をよく知っている人にも、そして全く知らなかった人にも深い関心と感銘を受けさせた。それは河上の波瀾に富んだ生涯がブラウン管を通して、いきいきと感じられ、河上像がくつきりと浮び上がっていた。映像の一過性がテレビ評伝から

アルバム評伝として、再現し、

一海知義、杉原四郎、平田清明、大島清、住谷悦治の各氏の講演論稿が編者住谷一彦氏により、河上の人と思想の今日的意義を問うという意図で編成され、編者自からの序とあとがきを加えられたものである。なお講演内容が「忠実に再現」されているので、当日の状況を十分に味わうことができる。

河上肇関係記事 一九八〇年 (1)

細川 元 雄

一九八〇年に発表された河上肇関係文献をみると、三月と九月に刊行された杉原四郎氏の『近代日本経済思想文献抄』と『日本経済思想史論集』とがある。両書とも氏の本格的な河上肇研究がその中に大きな位置を占めている。また、未見であるが、六月に山田洗氏の『河上肇』があり、『マルクス・レーニン事典』には大島清氏執筆の『河上肇』の項がある。以上いずれ専門家によって本会報でレビューをしていただくとし、本欄では「河上肇と彼をめぐる人々」について書かれたものを二、三紹介しよう。

『世界』誌の二月号から連載された住谷一彦氏の「日本思想ノート」は最初の三回を「河上肇と伊波普猷」にあて、明治四十四年河上の沖縄調査、そこでの舌禍事件をはさんで二人の思想交流の分析をおこなっている。同年八月十三日は伊波の三十五回忌に当り、那覇市立図書館で晩年河上の書いた伊波宛の未発表の書簡、はがきが公開され、二人の交流をしのぶ講演などの集会が開かれた。八月十二日付の新聞（沖縄タイムス、京都新聞、東京新聞）は一せいにこの未発表の書簡と集会開催を報じた。

『近代』誌五十五号（二月）には、一海知義氏による「河上肇と詩友

たち」がある。河上は晩年孤独な詩人であったが、ここで氏による漢詩分野での数少ない河上の「詩友」が発掘された。禅僧の間宮英宗（号は青竜）、教育者の谷本富（号は梨庵）、伯父の河上謹一（号は太拙）以上三人がそれである。伯父（母方の長男）謹一は「日本最初の法学士で外務省に勤務、後に日本銀行理事を経て住友家の理事となった人」であり、謹一について詳しくふれたものに、宮本又次氏の「河上謹一と河上肇」（『学士会会報』七四八号、七月刊）がある。

昭和初期河上の実践活動時代に交流の深かった大山郁夫は、この年九月二十日が丁度生誕百周年に当たった。そして記念出版として同月同日に評伝・回想が刊行された（『大山郁夫——評伝・回想』、新評論）。回想文に杉原四郎氏の「大山郁夫と河上肇——同志的結合時代のスケッチ」と住谷悦治氏の「河上肇と大山郁夫——静謐と情熱」とが載り、二人の交友関係が叙述され、しかも両論文とも二人の対象的な資質の相違にふれられている。

河上をめぐる人々として書かれた論文にはまだ取り上げなければならぬもの、また私の目にふれていないものがあると思われるが、最後に井出孫六著『抵抗の新聞人・桐生悠々』（岩波新書、六月刊）にふれておこう。桐生悠々、本名政次は明治六（一八七三）年生れ、河上より六つ歳うえて、明治三十二年東大法科を卒業、三十一年に入学した河上とは校内で顔をあわしていると思われるが、交友関係があったとは寡聞にして知らない。本書では雑誌『明義』誌上で、桐生が穂積八束の憲法講話を代講し、そのあとを若き河上がひきついでいることを指摘している。またこの雑誌の実際の主宰者が滝本誠一であり、滝本は後年河上をふくむ京大法科のスタッフたちの研究会に出席している。著者は穂積八束と雑誌の性格上からみて「未分化の時代の混沌があったともいえる」と述べている。

当番日記 (大門英太郎記す)

◎前号に申し上げた通り昨年の河上肇生誕百年記念事業の善後策に、会の通常の活動が阻害され申し訳ありませんでしたが、本年の総会の冒頭に申し上げた通り、スタッフの手によりようやく会報の本号をお届けする運びになりました。不手際の点は七十五歳の当番子に免じて会員諸氏の御有様を乞う次第です。

◎会報8号に摘記させて頂いた竜谷大学社会科学研究所の河上研究家、森竜吉先生、つとに河上肇記念会のために力を尽くして下さいました立命館大学の藤井松一先生が亡くなられた。ここに謹んで哀悼の意を表します。

◎亡なられたと言えは河上肇記念会の生みの親の一人とも言うべき藤田敬三先生が御令室を八月に失われた。法然院に葬り度いとの先生の御希望で去日、先生と御令息のお伴をして橋本方丈を訪ね、お願をして法然院に墓域を定める事が出来た。法然院には河上、河田両先達と墓域を同じうして、河上先生を敬慕して止まぬ弟子石川興二、福井孝治両先生が眠っておられ、更に昨年亡くなられた河上先生の義弟大塚有章氏もこゝ法然院の土になられる事になっている。河上先生御夫妻が旧知の人々の新来を莞爾として迎えておられる様を、想見して感慨多少のものがある。

◎菅原昌人文集『文』。——菅原昌人氏が亡くなられてから七年になる。私ども、河上肇記念会にとって菅原さんは今更喋々するまでもないが、往年の筑摩書房の河上肇著作集発刊記念会、更に京都で開いた河上肇追墨展、並びに講演会、引さつづき河上肇記念会の創立等々すべて菅原さんのイニシアティブの下に有志の共力によって事が運ばれ、現に河上肇記念会の本部は創立以来、今日まで菅原法律事務所（没後は岡田法律事務所）におかれて来たのである。今回没後七年を期して菅原さんの後をついだ岡田弁護士の手で菅原昌人文集『文』が発刊された。五百三十数

頁のまことに立派な大冊であって、故人自らの筆になる多岐に亘る業績が集大成され、故人の全貌を髣髴させる見事な出来栄である。特に私どもにとってありがたいのは「菅原終生の師、河上肇」という百頁に余る部分であって今や稀覯となっている「河上先生からの手紙」が複刻されている事である。戦前、戦中を通じて一本の赤い糸のように貫いている河上肇と故人との師弟の交情はまことに美しい限りである。この本は残念ながら非売品であるが、御問合わせは530大阪市北区西天満四丁目三ノ三、岡田、北村法律事務所（〇六―三六四―六七七）へ。

◎本部事務所は実に長い間、岡田弁護士の好意に甘えて岡田法律事務所に置かれていたのであるが、菅原さん没後あまり長くなっているのも、本来ならばスタッフの中心である京都にもって行き度いのであるが、急にその用意も出来ぬので、とりあえず表題下にあるように当番子のいる千代田商事内におくことにした。

岡田義雄氏並に事務取次の方をとって下さった原さんに深甚の謝意を表す者です。

編集後記

◎社会主義への幻滅が声高に語られる日本の現状。世界中で、あるべき社会主義への模索が、さまざまな形態で続けられている。辛酉が革命の年とは古来の迷蒙。されど……。細々と、弱々しく、されど目標は失うまい。

(0)

◎河上先生の御命日の一月三十日、昼休みを利用してお墓参りをした。お墓はすでにきれいに掃除され、お花、お線香もあがっている。聞けば近所に住まれる浄土寺西田町の大西健次郎さん、下南田町の宮本久代さんほかの人々だった。近所に住む者で墓守りをいたしますとの事、お彼岸も、お盆もしたいとの事、誠にありがたい事である。(T・O)